

大磯の左義長をめぐる基礎的研究

—2024年度の大北地区の動向を中心に—

真保 元(当館学芸員)

はじめに

大磯町大磯の海沿いは北下町や南下町といった下町地区といわれ、以前は漁師町としてにぎわっていたという。夏には御船祭、冬には小正月行事である大磯の左義長(以下左義長)が行われている。大磯町大磯の北浜海岸にサイトが9つ立ち、夜になると着火されるのである。この大磯の左義長は国の重要無形民俗文化財に指定されている。

本稿は左義長の現在をめぐるものである。周知の通り、2020年に新型コロナウイルスによるコロナ禍が全世界を襲ったことは記憶に新しい。左義長も記録を確認していくと休止・縮小等を行っていることがわかる。左義長は無形民俗文化財に指定されていることもあってか、現在ではパンフレットなどが作成されツアーなども行われており、無形民俗文化財としての活用が意識されていることがうかがえる。

そこで、本稿はコロナ禍を踏まえた大磯の左義長の現在を記述したうえで、現在の左義長をとりまく様相をとりあげる。

1.大磯の左義長をめぐる研究小史

本稿では大磯の左義長をめぐるものであるが、本章では大磯の左義長ひいてはそれを包括する神奈川県の小正月行事研究の動向を整理しておきたい。なお、神奈川県内の道祖神研究については浜野達也が丹念な整理を行っている[浜野 2020:1(112)-2(111)]。本章での整理は浜野による整理をアウトラインとしていることをお断りしておく。

神奈川県の小正月行事研究は、相模民俗学会会員をはじめとして神奈川県内の博物館学芸員など数多くの研究者により行われてきた。全体的な調査には神奈川県が刊行した道祖神調査報告書である『神奈川県の道祖神調査報告書』がある。各自治体に担当を振り分け、神奈川県内の道祖神の様相を明らかにした[神奈川県教育庁文化財保護課 1981]。同報告書では鈴木一男と飯田善雄が大磯町の担当であり、下町地区以外の大磯地区および国府地区の道祖神や小正月行事を報告している[鈴木・飯田 1981]。

同報告書が多量な情報量を持っていることから報

告書自体がテキストとして用いられることもあり、平野文明や倉石忠彦によって神奈川県内全体を通しての分析が行われている[平野 1985、平野 1986、倉石 2014]。こうした流れをうけつつ、浜野は足柄平野をはじめとしたオンベの形態論的分析や[浜野 2005]、旧相模国を範囲とした道祖神行事の意味論的分析を行っている[浜野 2020]。

このように、神奈川県全体をとらえる道祖神研究は幾度となく行われてきた。それでは、本稿で対象とする大磯の左義長そのものをめぐる研究成果にはどのようなものがあるか。まず、早い時期の報告としては『大磯町文化史』における記述があげられる[大磯町文化史編纂委員会編 1956]。

左義長をめぐるまとまった報告としては、神奈川県民俗シリーズとして1962年に刊行された『大磯の道祖神祭』がある。当該報告書は1960年と1961年に神奈川県教育委員会の依頼により相模民俗学会会員である中村亮雄と小島櫻礼が行ったものであり、当時の左義長の様子やその当時古老的ポジションの人の話を聞き取っている。坂下から長者町まで9つの地区すべての様子を報告しており、まとまった貴重な成果である[神奈川県教育委員会編 1962]。

また、左義長は数多くの報告が寄せられている。例えば、福田八郎は1960年代の行事の様子を報告している[福田 1968]。同時期には永田衡吉が1960年代の左義長の様子や古老の語りを報告し、他地域との事例を通じて考察を行っている[永田 1987]。その後、1970年代には和田正洲が県内の他地域の小正月行事とあわせて左義長の一通りの流れを紹介しており、「県下では一番盛大なものである」とした[和田 1974:240]。神奈川県史の民俗編でも田中宣一が坂下地区を中心に行事の様子を紹介している[田中 1977]。1980年代には、日守高造が報告を行っているほか[日守 1986a,日守 1986b,日守 1986c]、関野秀雄を含む北下町の住民が中心となって記した『郷土誌北下町』でも、宮世話人である宮代伊佐雄によって報告が行われている[宮代 1980]⁽¹⁾。

1990年代に入ると大磯町史編纂事業が行われ、左義長は長田平によって年中行事の項目で、鈴木通大によって信仰の項目で報告されており[長田 1998、鈴木 1998]、先述の『大磯の道祖神祭』報告書や『大

磯町文化史』などに依拠しつつ各行事の様子および各地区の特徴が報告がされている〔鈴木 1998〕。このほか、杉井純一が年齢集団の箇所が一番息子などの子どもが行う行事や、若者によるハダカマイリについてふれている〔杉井 1998〕。

町史編纂にあたって刊行された町史研究では、杉井が境界性に注目して大磯町内の各種行事を検討している。国府祭などと並行して左義長も扱っており、ヤンナゴッコなどをとりあげて陸へ豊漁を引き上げるといった意味論的分析を行っている〔杉井 2002〕。同時期に小川直之は大磯町郷土資料館で講演会を行っており、講演記録が書き起こされている。小川は大磯の左義長の特徴について「この地域の小正月の典型的なスタイルをもっている」と述べており〔小川 1998 : 10〕、左義長を小正月行事の全体の中で位置づける際には指標となる。平塚市博物館の展示図録『相模の道祖神』でも相模地域の小正月行事を扱っており、1990 年代当時の大北地区を中心とした左義長の様子が記述されている〔平塚市博物館 1999〕。

また、1990 年代の成果において、佐川和裕による成果は注目すべきであろう。佐川は島崎藤村の晩年に書き残した雑記帳に注目し、そこから当時の大磯における民俗行事を読み取っている。例えば、1941 年に記された雑記帳には左義長が記されており、現在では行われていない山車などの行事の様子を知ることができる資料だとして、1990 年代の左義長との比較を行っている〔佐川 1991〕。小川も大磯の左義長を含む神奈川県内の道祖神祭祀の分布や特徴を分析しており、左義長の際に行われるヤンナゴッコは分布や行事の特徴から伊豆半島北部の事例との類似性を指摘している〔小川 1993 : 316〕。

2000 年代に入ると、先述の浜野によるオンベの形態論が展開される。論考前半では足柄上郡の、後半では相模地域として大磯の左義長のオンベがとりあげられる。大磯のオンベは坂下、浜之町、長者町には弓のような部位があったとした〔浜野 2005 : 20〕。

近年の成果も振り返っておきたい。神奈川県立歴史博物館の 2020 年刊行の展示図録『特別展「かながわの正月—よい年になりますように—」』では、大磯町の小正月行事が数多く紹介されている。国府本郷地区の様子も紹介しつつ、大磯の左義長も丹念に紹介されている〔神奈川県立歴史博物館編 2020〕。

浜野も道祖神行事の意味論的分析を行っており、県内の事例を紹介するなかで大磯の左義長にふれている〔浜野 2020〕。左義長も含む相模の国の小正月行事を幅広く比較しており、浜野の議論は前述の小川の議論とあわせて左義長を相模地域の行事のなかで考えるうえで、大変貴重な成果といえよう。

ここまで、既往の研究成果を整理してきた。神奈川県内全体で道祖神研究が盛んに行われつつ、大磯

の左義長も比較研究の対象として検討されてきた。

左義長については、個別事例的な報告も多く寄せられている。これらの成果は時間が経過し、様態が変化していることが想定される。この間、新型コロナウイルスによるコロナ禍もあった。各地で民俗行事の縮小・中止が相次いだが左義長も例外ではない。そのため、現在の様態を把握することが急務でもあるといえる。今後、左義長を詳細に検討していく際の基礎的なデータの蓄積が求められている。

後述のように、左義長の主な担い手である下町地区では、現在の漁業人口は少なくなっている。生業が大きく変化した現在の左義長の様相を考えていくためには、現状を把握することが必要であろう。全国各地の無形民俗文化財において、継承が危ぶまれている。その中で従来の担い手にかかわらず様々なアクターが協働することにより、持続されていく事例も存在する。このような世相の中で、大磯の左義長は現状どのような状況であるか。

そこで、本稿では 2025 年 1 月に行われた左義長の様子を報告し、既刊の報告と照らし合わせて変化を考え、現状を把握していきたい。左義長は 9 つの地区で行われるが、本稿では大北地区の事例を中心としてとりあげていく。

2. 対象の概要

（1）地域概要

本章では大磯の左義長の概要をまとめていく。まずは地域概要をおさえよう。左義長は大磯町のうち大磯の北下町・南下町という下町地区を中心に、山王町、長者町を加えて行われる。参加する地区は、いずれも住所上は大磯町大磯である。

下町地区は、大磯町全体では東側にあたる大磯地区の海沿いに位置する。海沿いを見てみれば、北下町は北浜海岸、南下町は照ヶ崎海岸があることから、夏は多くのレジャー客により海沿いがにぎわう。東海道からは一段下ったところに位置し、地区内を下町通りといわれる通りが縦断している。下町通りは家々が密接に並び、細い路地が間を這う作りとなっており、漁師町の町割りの面影を残す景観である。

当該通りは高来神社夏季大祭である御船祭の際には船形山車が巡行するように、下町地区の中心的な空間である。南下町には大磯港があることから、下町地区はかつて漁師町としてにぎわいをみせていた。その後、西湘バイパスの開通などの環境変化により漁業従事者は減少し、現在では遊漁船が中心となっている。現状、拙稿でもふれたが地付きの漁師は北下町には存在せず、南下町に数軒残っているのみである〔真保 2024 : 73〕。なお、左義長の際には北下町は大北・浅間町・中宿の 3 つ、南下町は大泊・



図1 山王町および長者町の位置関係
(杉井 1998 : 14)

子の神・浜之町・坂下の4つの地区に細分される。これについては次節で詳述する。

山王町は、北下町よりも北側に位置する。地区割自体は縦長となっており、高麗山から北浜海岸まで位置している(図1)。長者町は山王町よりさらに東側に位置している。歴史的背景を見てみれば、1890年に大磯の町で大火があり、それにより南下町の住民を長者町に移すこととなった。山王町、長者町いずれも国道1号線が地区内を走り、住宅が立ち並ぶ市街地となっている。

北下町は南北に約300m、東西に約200mで、面積は約0.05k㎡である。南下町は南北に約300m、東西に約350mで、面積は約0.04k㎡である。山王町は南北に約1km、東西に約400m、面積は0.37k㎡である。長者町は南北に約500m、東西に約500mで、面積は約0.18k㎡である⁽²⁾。

対象地域の世帯数・戸数についてもふれておく。それにあたり、北下町、南下町、山王町、長者町をふくむ大磯町大磯の統計データを参考にしたい。大磯町大磯全体の数値としては、2025年1月1日時点で2565世帯があり、人口は5773人(男性が2795人、女性が2978人)である⁽³⁾。このうち、北下町は1990年代時点での詳細がわかっているため、参考までに提示しておく。「大北は150戸、浅間町は60戸、中宿は22~44戸である」[杉井 1998 : 9]。南下町は「全体では200戸程度であり、このうち子の神が63戸ほどである」という[杉井 1998 : 11]。本稿で対象とする大北は、1955年生まれの人によれば2025年現在、150戸程度である。

(2) 祭礼概要

ここでは左義長の概要を整理する。大磯の左義長は小正月行事のことを指し、12月8日のコトヨウカ行事である一番息子から、1月半ばのサイトバライまでを指している。いくつもの行事が折り重なるように行われる、複合的な行事であるといえよう。

文化財的側面としては、現在は国の重要無形民俗文化財に指定されている。国の指定を受けたのは1997年で、それまでは神奈川県指定無形民俗文化財であった(1978年県指定)。

左義長全体としては、9つの地区で行われる。順に述べれば、南下町は坂下・浜之町・大泊・子の神の4地区、北下町は中宿・浅間町・大北の3地区(図2)、これら7つの地区に山王町と長者町の2地区が合わさり、合計9地区となっている。大北では氏神である道祖神社(塞神社)の祭祀として行われるが、南下町の4地区では氏神と対応しているわけではないように、それぞれの地区によって祭祀形態に細かな差異がある(表)。

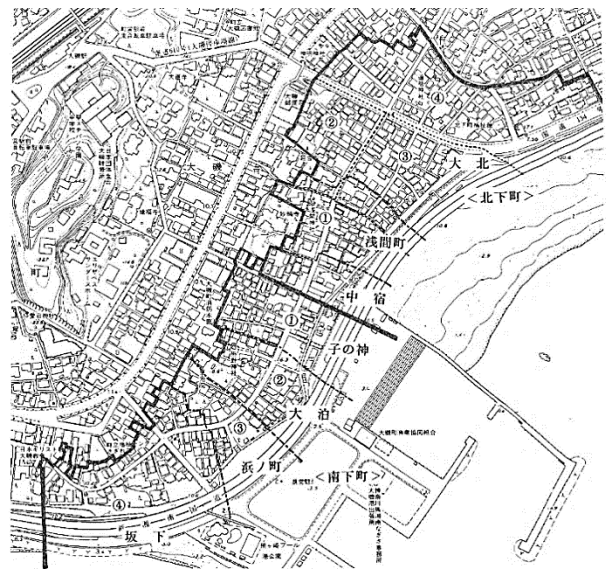


図2 北下町および南下町の道祖神祭祀組織
(杉井 1998 : 10)

祭礼を行う担い手は基本的に各地区の宮世話人(大北では宮役員という)であり、各地区の宮世話人の代表が集い、大磯町左義長保存会が結成されている。宮世話人は大北の場合は宮役員というが、全体で12人おり4年任期で6人ずつ交代することで引き継ぎをしている。

歴史的な経緯として、山王町は後から加わったとされる[永田 1978 : 60]。先述した通り、長者町も1890年の火災により南下町から移住した人々によって作られた地区であることから、後から加わった地区と考えられよう。

表 各地区の特徴および行事開催状況（鈴木 2003：617 より筆者作成）

地区名	氏神	宮元	宮世話人	若者組の 関与	ゴロ石	神体	オカリヤ	オンベ	ナナトコ マイリ	綱引き	屋台
坂下	熊野神社	○	○	○	○	白木造りの お宮	○	○	○	○	×
浜の町	熊野神社	○	○	○	○	双体道祖神	○	○	○	×	○
大泊	熊野神社	○	○	○	○	双体道祖神	○	○	○	×	○
子の神	熊野神社	○	○	○	○	双体道祖神	○	○	○	○	○
中宿	稻荷社	○	○	×	×	幣束	○	○	○	×	×
浅間町	浅間神社	○	○	○	×	庚申塔の 破片	○	○	○	○	×
大北	道祖神社	×	○	○	×	白木造りの お宮	○	○	○	○	×
山王町	日枝神社	×	○	×	×	青面金剛像	○	×	○	×	×
長者町	×	○	○	○	○	双体道祖神	○	○	○	×	○

左義長全体の大まかな流れを、2025 年現在の様子をもとに提示する。コトヨウカ行事である 12 月 8 日の一番息子から始まり、12 月中はサイトにつけるわら飾り（ナイカザリ）や、紙飾りなどの準備が行われる。1 月に入ると、5 日にサイトに用いる竹や松を調達する竹買いや松買いがある。9 日には道祖神付近にオカリヤが立ち、夜になるとオカリコが行われる。この期間にオカリヤを回るのがナナトコマイリという。12 日にはサイトの作成およびサイトバライ、ヤンナゴッコが北浜海岸（以下浜という）で行われる。もともとは 1 月 14 日をサイトバライの日としていたが、2009 年実施時より第三土曜日をサイトバライの日に変更した。

さて、9 つの地区で多様な行事が行われるため、ともすればどの地区でどの行事が行われているのか混乱を招くこととなるため、表 1 を参照されたい。なお、表 1 は鈴木が『大磯の道祖神祭』（1962）を参考に作った表が元となっており〔鈴木 2003：617〕、現在では行われていない行事もある。

ここまで、対象の概要として地区および行事全体の流れや情報を整理した。左義長は漁師町であった下町地区が中心となっていく複合的な祭礼行事だが、現在は生業構造が変化していることがうかがえる。それでは、左義長の実際の様子を提示していくこととしたい。

3. 左義長の現在—2024 年度の様子—

（1）調査概要

本稿で提示するのは、2024 年度に実施された大磯の左義長の調査データである。12 月 8 日の一番息子から順番に提示を行うが、筆者は大北地区を中心に調査したため、基本的には大北地区の内容となる。

本来であれば、それぞれの地区の詳細をおさえるべきであるが、基本的には筆者一人で行った調査の都合、記録しきれていない個所があることをお断りしておく。なお、1 月 5 日～9 日については、都合により調査ができなかった。記述にあたって閲覧性を考慮し、筆者が適宜見出しをつけている。また、本稿で掲載する写真は、特段の注記が無い限り筆者が撮影したものである。

（2）左義長の様子

① 2024 年 12 月 8 日（一番息子）

一番息子 この日は一番息子である。坂下地区では 8 時 30 分に集まり、ガイダンスのうえでスタートがはじまった。今回は東町と台町から子どもが来た。9 時 30 分まで約 1 時間をかけて 50 軒ほどを回る。9 時 30 分まで約 1 時間をかけて 50 軒ほどを回る。流れとしては家々でドアチャイムを鳴らし、家の人が出てくると祈願内容を伝えてくるので、それ通りに子どもが唱える。唱え終わると、家人が子どもたちへ祝儀を渡す。例えば、「家内安全でお願いします」と家の人に言われると、「家内安全、一番息子」



図3 一番息子（2024年12月8日撮影）



図5 ナイカザリ作り（2024年12月15日撮影）



図4 サイト飾り付け作成(2024年12月8日撮影)

と子ども（年長者）が言ってゴロ石を地面に落とす（図3）。次の子どもが「二番息子」、さらにその次の子どもが「三番息子」というように、続けて唱えて落としていく。今年の場合は9人で回っていたため、「九番息子」まで参加していた。

祈願内容は「家内安全」「一年間健康でいられますように」といった、家内安全を願うものが多かったが、商売繁盛を願う家も中にはみられた。

サイト飾り付け作成 一番息子と並行して行われていたのが、サイトにつける飾りの作成であった。筆者の確認の限りでは大北がこの日に行っていた⁽⁴⁾。9時に北下町福祉館に10人ほどが集まり、吹き流しや巾着などを作成する（図4）。

男性陣は黄・紫・青・赤・緑の5色の短冊で輪を作り、吹き流しを作成する。色の順番は黄・紫・青・赤・緑であり、これを10組組み合わせ、計50個の輪で1つの吹き流しとなる。これをいくつか作成していた。女性陣は紙で巾着を作成していた。11時には各自撤収し、11時に解散となった。

② 2024年12月15日 サイトのナイカザリ作り
ナイカザリ作り この日は9時に北下町の道祖神社に集合し、サイトに巻き付けるナイカザリを作る。鳥居から脚立などに縄を張り、二人一組でナイカザリを作っていく（図5）。

作る際には水桶に水を入れ、わらをつける。これはわらの穂を湿らせて編みやすくするためである。そのわらを縄にかけ、ナイカザリを作っていく。編むのに一人、わらを水桶から渡すのに一人で二人一組となる。1946年生まれのB氏によれば、このようなやり方は簡易的なナイカザリの作り方、20年ほど前から行っている。本来は手と足を使って編むという。現在、手と足で編む本来のやり方は、1955年生まれのC氏しかできない。B氏より一回り上の世代の人たちは、手と足を使って編んでいた。B氏によれば、簡易的なやり方は、南下町で行われたものを参考にしている。

ナイカザリに使うわらは、かつては買っていたが、現在は大磯町内の西小磯地区の農家から融通してもらっている⁽⁵⁾。

仮宮受取 11時ごろになると、仮宮を取りに行く。現在、仮宮は町内の方をお願いして作ってもらっている。これは7～8年くらい前からのことで、それ以前は大工などをお願いしていた。なお、材料のベニヤなどは近所のロイヤルホームセンター湘南大磯店で購入しているようである。受け取った仮宮は道祖神社の本殿に収める。

仮宮の大きさは、いずれも最長部での計測で横幅が41.0cm、縦が42.5cm、奥行きは厳密には計測できなかったものの、おおよそ45cmであった。

この日は11時半ごろになると片づけを行い、12時に解散となった。

③ 2025年1月11日 ナナトコマイリなど

ナナトコマイリ 下町通りや長者町では各地区がオカリヤを建てており、子の神や長者町では子どもが籠っていた。長者町では17時から20時にかけて、オカリヤ前で太鼓を叩いている。長者町では20人ほどの子どもたちがオカリヤの周囲に集まっており、特に賑わっていた。筆者は19時30分ごろ下町通りを歩いていたが、参拝者もみられた。

オカリコ 大北では同時刻にオカリコを行っている。今年は9日（木）～11日（土）まで行ったようである。時間帯としては、18時から21時前まで行う。一番息子などと同じく家々をめぐり、唱え事をして祝儀をもらう。

子どもだけでまわり、もらった祝儀は子どもたちで山分けをするという。この日は3人の子どもが行っていた。唱え事は以下の言葉を2回唱える。

オカリコメデテエ オイエハゴハンジョウ
ゴハンジョウ ゴハンジョウ
フクノカミガ マイコンダ
マイコンダ マイコンダ

一人が太鼓を叩きながら、ほかの者が唱え事を唱えながら、腕を組み合わせる舞う動作をする。回るルートは大まかに決まっていますが、ヒがある家は回らないが、ピンポンをするまでわからないこともあり、ヒがあると断られるという。

筆者は19時50分ごろ道祖神社前でオカリコのグループに遭遇した（図6）。この日は早めに切り上げるためか、20時に終了であった。

④ 2025年1月12日 サイトバライ当日

この日は午前中にオンベの解体およびサイトの組み立て、午後はサイトへの着火やヤンナゴッコなどが行われた。準備作業はある程度同時並行して行われるため、それぞれを往復しながらの記述である。

ソリの作成・オンベとオカリヤの解体 朝6時ごろから5名ほどが集まり、道祖神社でソリの作成とオカリヤの解体が行われた。オカリヤから仮宮を外し、ソリの台座に載せる。ソリに載せたあと、わら縄をの字編みで編みこんでいく（図7）。大体6時47分ごろから編み始める。この後、7時ごろには参加者が増えてきて、オカリヤの撤去が進んでいく。7時10分、オカリヤの撤去が終わる。オカリヤの撤去が終わると、オンベの解体が始まる。7時20分ごろオンベを倒す。倒したオンベは浜にもっていく。

10時15分ごろ、の字編みが終わる（図8）。ソリに綱引きなどで用いる綱をつけていくが、綱の巻き方を確認するためにスマートフォンで過去に行った際の写真を確認しつつ進めていた。



図6 オカリコ（2025年1月11日撮影）

図7 ヤンナゴッコのソリへの編み込み
（2025年1月12日撮影）

図8 ヤンナゴッコのソリ（2025年1月12日撮影）

サイト作り 7時35分ごろ、オンベは浜にもっていく。スコップで穴を掘りつつ、オンベに飾りをつけていく。8時20分ごろ、大北のオンベが立つ。同じころ、山王町のオンベもたつ。坂下と長者町は8時15分の時点で立っていた。この付近で大磯中学校の中学生たちが手伝いとして集まる。この付近で大磯中学校の中学生たちが手伝いとして集まる。中学生の手伝いの詳細は4章で触れたい。



図9 オンベに松をつける（2025年1月12日撮影）

オンベを立てたあとはオンベにオカリヤの前に立てていた門松をオンベに巻き付け、その周りにアンコとよばれる木材を三角錐状に立てる。その後、周松をつけていく（図9）。松をつける際、葉が下を向くようにつける。これはブロッコリーのようにこんもりとしないためである。

10時ごろ、中学生は解散となる。その後、正月飾りなどのお飾りを出してサイトにつける準備をする。ダルマは底にヒモをつける。お札類も展開されていたが、簡単に確認した限りでは高来神社のものが多い。白岩神社のものもいくつか混ざっていた。大雄山（南足柄市）や寒川神社（寒川町）のものもあり、中には下溝八幡（相模原市）のお札も確認できた。

11時20分ごろ筆者が確認した際、サイトにナイカザリを巻いていた（図10）。巻いていく際は時計回りに巻いていく。サイトの構造としては、内側からオンベ→竹（門松）→アンコ→松→お飾り→ナイカザリ→ダルマの順である。

12時に完成となる（図11）。潮水を水桶一杯分汲み、サイトにかけて終わる。12時15分になると豆腐を食べて終了である。

ソリの御祓い 12時55分になると道祖神社に高来神社の神主が来て、ソリのお祓いを行う（図12）。宮役員と子どもたちが参加し、行事の無事が祈願される。13時30分ごろ、お祓いが終わったソリを浜に持っていく。A氏によれば持って行くルートは決まっており、基本的にヤンナゴッコの際に浜から道祖神社に持ってくるルートの逆順であるため、図18のルートの逆順となる。

13時38分、浜へ到着しソリをサイトのそばに置き、一度解散となった。この後、地域内のコンビニエンスストアでは左義長用の団子の粉が販売されており、15時から左義長用の団子セットを販売する旨が告知されていた。大磯駅前でも、団子をつける用の竹が販売用のためか並べられていた。



図10 ナイカザリを巻く（2025年1月12日撮影）



図11 完成した大北のサイト
（2025年1月12日筆者撮影）



図 12 道祖神社でのお祓い(2025 年 1 月 12 日撮影)

サイト着火前 17 時、北下町旧公民館に三社会と宮役員が集まる。中で豚汁などが振る舞われ、食事を取る事となる。浜の様子としては、18 時を過ぎると 18 時 30 分の点火に向けて続々と人が集まる。暗くなっている浜では発電機を使って電気がつけられていた。会場内には人が続々と押し寄せており、海外からの観光客と思われる人も多数みられた。

サイト着火 18 時 30 分になると、サイトに火を入れる。点火する際は恵方の方角から行う。すぐにサイト中に火が回り、団子を火に入れて焼く人がみられる。サイトの周辺は火の粉が舞い上がる(図 13)。

サイトに火が周って倒れるとヤンナゴッコが始まるが、地区によって倒れる時間は前後する。暗い中で一斉に点火作業が行われ、大勢の人が集まることから俯瞰的に確認することはできないが、筆者が確認できた限りでは浅間町は 18 時 36 分であり、18 時 38 分ごろになると山王町のサイトが立つ方角からメガホンで何かを言う音が聞こえた。恐らく山王町はこの時間に倒れていたのであろう。大北の場合は 18 時 41 分に倒れた。

ヤンナゴッコ サイトが倒れると、大北ではヤンナゴッコが行われる。18 時 42 分になると三社会の裸衆が登場する(図 14)。裸衆は褌を着けているのみで寒いように思われるが、サイトの近くにいる場合は「火の粉がかかり、寒いより熱い」との声が聞こえた。

18 時 47 分ごろになるとヤンナゴッコが始まる。裸衆は海に入って陸と海で綱引きを行う(図 15)。見物人が多かったが「引くのを手伝ってほしい」旨の声がかかり、見物人たちも綱を引くこととなる。3 回駆け引きを行い、18 時 53 分頃綱引きは終わる。

18 時 54 分、ソリを逆さにして叩きつけた後に仮宮を踏みつけて破壊する(図 16)。19 時前になるとサイトの中にソリを転がしていた。19 時頃、酒を飲み町内のほうへソリを曳き始める(図 17)。曳く際



図 13 点火されたサイト (2025 年 1 月 12 日撮影)



図 14 裸衆の登場 (2025 年 1 月 12 日撮影)



図 15 綱引きの様子 (2025 年 1 月 12 日撮影)



図16 ソリを壊す（2025年1月12日筆者撮影）

には伊勢音頭を歌い、歌った後に引っ張ることを繰り返し、道祖神社へ向かう。ルートとそれぞれの歌う時刻は図18の通りである⁶⁾。

19時46分、道祖神社に到着したため年男を探し、胴上げを行う。胴上げが終わると宮役員代表であるA氏が挨拶をして行事自体が終了、各自解散となる。

後片付け 裸衆たちは、バスに乗ってさざんか荘の風呂に入りに行く。見物人たちは帰っていくが、A氏・B氏・C氏ら宮役員は後片付けを行う。20時14分、ソリから仮宮を外し、縄を取る。仮宮は浜へ持っていく、サイトに入れて燃やす。21時ごろの段階では浜から道祖神社へリアカーで発電機などを戻していた。提灯の部材なども道祖神社の倉庫へ戻し、21時40分に最終的に解散となった。



図17 ソリで町内をめぐる（2025年1月12日撮影）

⑤ 2025年1月13日

後片付け この日は前日12日の後片付けの残りをを行う。なお、昼の12時すぎに浜に行った際には、大北や坂下のサイト部分には火がついていた。

道祖神社に13時になるとA氏ら5人ほどが集まり、用具類の片付けを行った（図19）。前日のヤンナゴッコの際にソリやロープなどに砂がついているため、これを落とす。ソリは箒を使い、ロープはホースで散水する。ブルーシート類も砂がついているため、ホースで散水して乾かす。浜でサイト用アンコの保管用（放火や盗難防止用のカバー）として使用したブルーシートもあり、これらは大磯町の生涯学習課から借りている。14時ごろに大磯町立図書館の生涯学習課まで返却して解散となった。

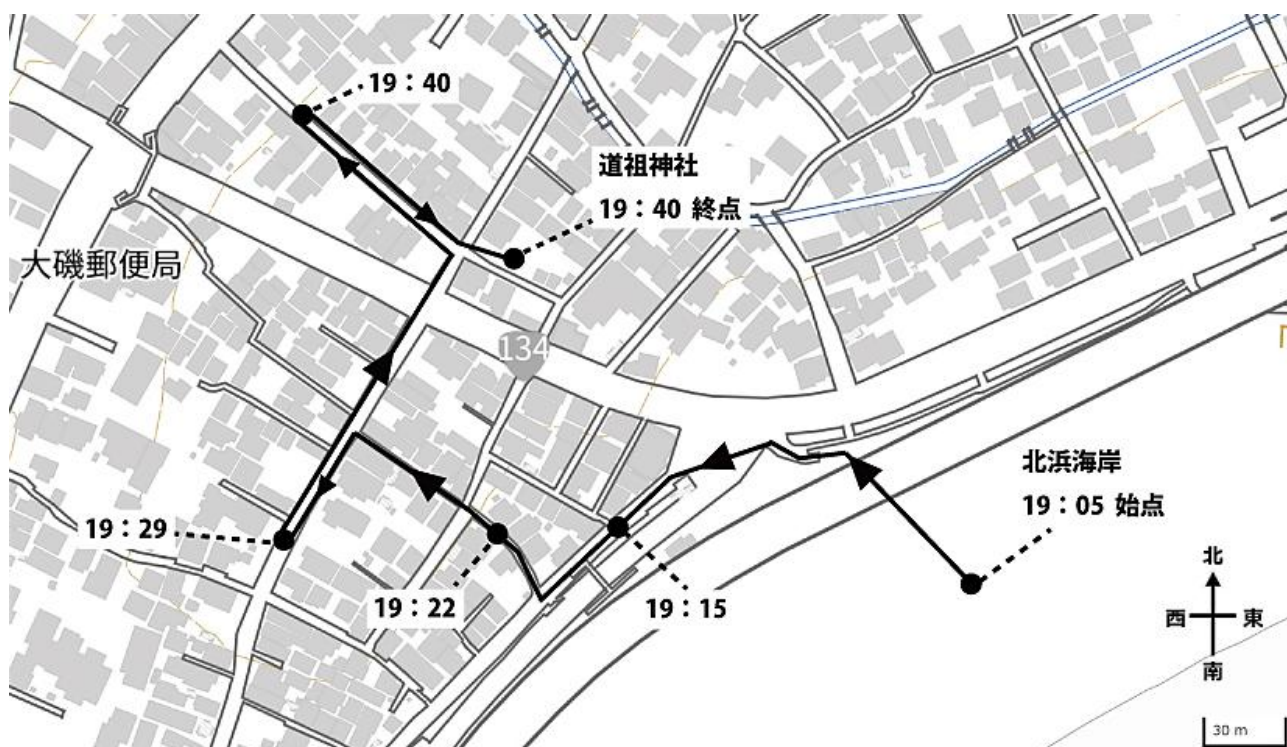


図18 ヤンナゴッコのソリのルート（国土地理院地図 Vector より筆者作成）



図 19 片付け（2025 年 1 月 13 日撮影）

ここまで、本章では 2024 年度の大磯の左義長の様子を、大北を中心に見てきた。次章ではこれまでの報告と既刊の報告との比較を行うことで、現在の左義長のありようを描き出していく。

4. 考察

（1）過去との比較

本章ではこれまで提示してきた調査データと既刊報告類との比較により、現在の左義長の位相を確認するとともに、いくつかの検討を示していく。

最初に、各行事開催の有無を見ていきたい。『大磯の道祖神祭』を見てみれば、オカリコはおおよその地区でも行われており、一番息子も南下町ではどの地区でも行われていた〔神奈川県教育委員会編 1962〕。一方、現在ではオカリコは北下町のみ、一番息子は南下町の坂下地区でのみ行われる⁽⁷⁾。綱引き行事も、浅間町ではソリを置くのみとなっており、綱引き自体は行っていないようである。坂下ではソリこそ用いないものの、綱を引くようである。そのため、ヤンナゴッコは現在、子の神、大北、長者町の 3 つで行われている。

このほか、1960 年頃の記録では町内によっては人形が乗っている屋台（山車）を引くところがあったが〔神奈川県教育委員会編 1962〕、現在では行われていない⁽⁸⁾。しかし、佐川によれば屋台は浜之町、大泊、子の神で出るが、山車に藁人形を載せているのは戦前までで、早い地区では大正末～昭和初期には廃絶したという。藁人形も昭和 30 年頃の写真には確認できず、藁人形を作らなくなったあとも山車だけは組み立てられていたのではないかと考察している〔佐川 1991：7〕。神奈川県の記事では少なくとも浜之町の記述において、藁人形をつくって乗せることが現在形で記述していることから、報告書と佐川の記述に矛盾がみられる。今後改めて聞き取り

調査を行っていくことで補完していくこととしたい。

一番息子やオカリコは家や生業の繁栄を願う行事である。そのような現世利益の内容にも変化が生じている。報告書によれば、一番息子は「〇〇さんに、よい嫁が来るように、一番息子」、「〇〇さんに、よい婿が来るように」、「よい赤ちゃんができるように」などと唱えていたようである〔神奈川県教育委員会編 1962：3-4〕。一方、今回調査した限りでは、一番息子では報告されているような願いは無く、家内安全を願うものが大半であった。浜之町の 1962 年生まれの D 氏によれば、地域の高齢化が背景にある。このことを如実に表すものとして、例えば大北地区の宮世話人は同地区の民俗調査報告書では 3 年任期であるが〔杉井 1998：12〕、A 氏によれば現在は 4 年任期であり、宮役員の担い手が少ないこともあり、現在同じ人が 3 期目として繰り返し担当している状況である。

各種作り物の形態の変化も見ていこう。オカリヤは、かつては現在のように木組ではなく、門松などで作られていたようである。しかし、1950 年代時点で「近頃は門松が少ないので、木材で組立小屋にと変った所が多い」とされ〔大磯町文化史編纂委員会編 1956〕、1950 年代を境に藁等のものから現在の木製の組み立て式に切り替わった可能性がある。

サイトにも変化がある。山王町のサイトは、1960 年調査時では、現在のように円錐形ではなかったようである〔神奈川県教育委員会編 1962：57〕。円錐形の現在のようなサイトの形になったのは、1978 年からであるという⁽⁹⁾。

サイトの中身であるアンコの部分も、A 氏が子どものころは家々の門松が使われていた。門松は平塚などの町外までリアカー引っ張っていき、回収をしていた。今は門松が立たなくなったり、立っても小さいものが多かったりして、門松ではアンコをまかないきれないという。そのため、藤沢の土木管理を行っている伐採業者から間伐材を融通してもらい、アンコとして活用している。この点は次節で詳述する。

また、近年では新型コロナウイルス感染症によるコロナ禍があったことは周知の事実であろう。多くの無形民俗文化財が中止・縮小に追い込まれ、左義長も例外ではないことは既に述べたが、コロナ禍の際はどのような開催状況であったか、A 氏によれば次のような状況であった。

【事例 1】

コロナ時は各道祖神に集まった門松と正月飾りをゴミとして処理するのは抵抗があるとして、海岸に一カ所に纏めて火をつけた。他の町内からも「お飾り等どうしたらいいの？」など問い

合わせがあった為、各地区の神社等の集積場所に持って来てくれれば役員のみでまとめて処理した。例えば、北下町の地区では七草(1月7日)後にお飾り・ダルマ等を道祖神社に個人的に持って来ているという。

縮小しながらも、お焚き上げのように実施するなどして継続させていたようである。続けて、コロナ禍が明けた際の状況について、次のように語る。

【事例2】

コロナ禍明けの左義長準備については大きく困った事はなかったが、海岸でのサイト作りに必要な備品を忘れ何度もあれが無い、あれはどうしたなどは結構あった。協力者がいないとかの問題はなかった。

コロナ禍による祭礼のコミュニティへの影響は軽微だったといえる。それでは、前述の各行事開催の有無も含め、何がこの地域の中で変わってきているのだろうか。

過去との大きな違いとしては、地域の生業構造の変化であろう。大磯の下町地区は特に漁師町としてかつてはにぎわいを見せていた。一方、現在の下町地区での漁業従事者の人口は、南下町の坂下にわずかに残るばかりで、北下町には漁師が一人もいないという⁽¹⁰⁾。そうだとすれば、漁師が減少した現在において、主な担い手として考えられる左義長も影響を受けざるを得ない。このことについては、改めて次節でとりあげてみたい。

以上、本節では既刊報告書との対比により、左義長の現在の様子を浮き彫りにしてきた。過去から変容していく中で、コロナ禍よりも地域の生業構造の変化が行事に影響を与えていることがわかる。このことを踏まえ、次節では現在の左義長の様相をより一層確かにするためにも、現時点での左義長の課題と、各種の実践を浮き彫りにしていく。

(2) 関係性の中で形作られていく左義長

ここまで現在の左義長の状況を確認してきた。ここでは現時点で地区が抱えている課題を提示し、そのうえで地区がどのように克服しようとしているのかを確認しよう。その際、左義長が無形民俗文化財となっていることが鍵となる。さて、再びA氏への聞き取り調査の記録から見ていきたい。

【事例3】

現在の課題として、アンコの確保をどうするのかという課題がある。通年は藤沢の海岸防風林の間伐材を利用させて貰っていたが、将来的

に仮にそれができなくなった際の方策も練らねばならない。

また、子どもが少なくなっていることも課題である。特に地域の子どもの少ないのは下町と呼ばれる南下町と北下町である。左義長は子どもが担う行事もあり、例えば南下は一番息子の子どもがいない、北下はオカリコの子どもが少ないといった悩みがある。下町地区では役員の高齢化も課題である。

事例3の前半部分では左義長のサイトの材料であるアンコ(間伐材)の確保が課題となっているが、これは約20年前から藤沢市の松林などを管理している伐採業者に調達をお願いしていることによる。その際、大磯町生涯学習課が保存会と事務所や業者との仲介をはかることもある⁽¹²⁾。

後半部分では、子どもの減少が課題になっているという。一番息子やオカリコ、ナナトコマイリの際のオカリヤのように、左義長において子どもが担う行事は多い。しかし、地域の高齢化が進む中で地域内に子どもがおらず、行事が遂行できなくなる可能性もある。そこで、一番息子を実施する際には下町地区にある寺院の東光院が仲介となり、地域外の子どもを行事の参加者として呼び込んでいるという。これが功を奏し、3章で確認したように2024年12月実施の一番息子では9人もの参加があった。

上記の件とは別に、A氏によればオカリコは地区の低学年の子が新たに参加してくれたという。そのため、従来は開始時間が19時だったが、帰りが遅くならないよう今年は18時開始としており、地域内部での継承が行われていることも付記しておく。

行政としては小中学校での出張授業も行っている。左義長保存会のメンバーが出向き、解説やサイトの組み立ての実演などを行っている。筆者は2024年12月6日(金)の大磯中学校および12月10日(火)の国府小学校での出張授業を見学したが、大磯中学校では左義長の映像を見ながら全体の流れを確認した。また、国府小学校では体育館内でサイトを組み立てたほか、一番息子の体験を行っていた。このうち、大磯中学校ではサイトバライ当日の12日に、中学生が各地区に手伝いとして派遣されていた。これは授業の一環として実施しているもので、8時に生徒が集合したうえで各サイトに散らばり、8時~10時までの時間でサイト作りに参加している⁽¹¹⁾。ここまで行政での取り組みを紹介してきた。次に行政以外の企業・団体いわば、各種アクターのとりくみをみていく。

大磯町観光協会では左義長にあわせてA4サイズ4ページのパンフレットを毎回作成し、配布している。このパンフレットは2015年より刊行されてお

り、左義長のあらましや一番息子、道切り、セエトバレエやヤンナゴッコといった各行事の解説が記載されている。ここで注目したいのが、パンフレットの裏側である。試みに 2025 年 1 月に配布されていたパンフレットを見てみれば、裏表紙には「国指定重要無形民俗文化財「左義長を訪ねる」～左義長ゆかりの道祖神を巡る～ガイドツアー」、「左義長保存支援募金」、「清酒「大磯左義長」販売」、「左義長立ち寄り処」、SNS の Instagram を用いた「おおいそまち観光フォトコンテスト」などの文言が確認できる。ガイドツアーは NPO 法人大磯ガイド協会が、立ち寄り処と保存支援募金は NPO 大磯だいすき倶楽部が主催している。

このような支援が立ち上がる背景には、運営費という課題があった。2015 年 12 月 18 日更新の地域情報紙『湘南ジャーナル』に当時の状況がわかりやすく整理されているため、引用したい。

衰退の要因は 1 つ、言わずもがなの「運営費」だ。大磯の左義長はサイト制作などで費用が結構かかるのである。

元は漁師町の、漁師中心に開催されてきた祭りであり、実際に数十年前までは漁師が沢山いたという。そして漁師らの持ち出しに加え、さらに地域からの「花代」といった祝い金の寄付も多く、運営には支障がなかったそう。だが高齢化、人口減少社会の時代を迎え、漁師は激減、花代も減少。地域でつくる保存会だけではまかないきれず、だんだん先細ってきていよいよ窮地に陥った、という実情だ。

昨年 4 月、保存会の会長に就任した芦川さん（53）は「就任時点で保存会の通帳には 0 円。もう地域だけでやっていくのは限界で、地域の人たちは万歳（お手上げ）しかけていたんです」と言う。⁽¹³⁾

かつては漁師が主な担い手であったことから、運営費も漁師の持ち出しによっても賄われていたが、先述しているように現在は漁師の数も減少し、地域の保存会だけでは支えきれないところもあった。そのため、前述の清酒「大磯左義長」やだいすき倶楽部の事業がスタートしたという。このほか、「左義長応援団」というボランティアを募集し「大磯町役場政策課編 2024:3」、保存会だけでなく様々なアクターを伴って継承にできるような体制を作り上げようとしている。

左義長も含め、全国各地の無形民俗文化財全体の動向として担い手当事者以外の関与が増えているのも事実であろう。小川直之は「企業・団体等による多面的支援制度」として宮崎県や長野県の民俗芸能

における行政の支援を具体例としてあげているが〔小川 2022〕、左義長も観光協会やガイド協会などの担い手以外の存在による支援の関係性によっても形作られている⁽¹⁴⁾。

このような無数の関係性により、祭礼は私たちの目の前で行われている。俵木悟は民俗芸能について次のように述べるが、同じことが祭礼でもいえよう。

現実に、現在も数え切れないほど多くの民俗芸能が、地域の祭礼や生活のサイクルのなかで行われていることは言うまでもない。しかしそれらは、当然のごとく「今まで通り」行われているのではない。それこそ 1 度ごとの上演の度に、外部からの見えない力によって、また参加する者個々の日常生活から得られる情報や経験によって、変化の圧力を加えられている。しかし一方で、少なくとも自分たちがそれを担う以前から、近しい先輩たちによって伝えられてきたものを容易に変えてはならないというある種の規範意識や、わざわざ新しい試みをする必要も感じないという慣性の力によって、変化は抑制される。そのような様々な要因が絡みあった拮抗状態の結果として、1 度ごとの上演は現出するのである。たとえそれが様式的に、外から見てあまり変化していないとしても、そこに働いている諸要因の力学は一様ではない。〔俵木 2009:84〕

祭礼は毎回繰り返して行われていく。同じように繰り返されている祭礼であっても、当事者たちの実践や様々なアクターによる支援も含め、諸要因によって細かな違いは出てくるであろう。

左義長は、以前は漁師が祭礼の中で大きな役割を担っていた。現在では地域内の生業構造も変化し、勤め人が多くなっている。地域の祭礼を中心に担う存在が変化すれば、祭礼も変わる事となる。その際、無形民俗文化財である左義長は観光協会やガイド協会、NPO 団体などが支援に加わる事となる。そして、SNS などのインターネットメディアが発達している 2025 年現在、フォトコンテストなどのインターネットなどを用いて発信することによって、さらに外部にも左義長は認識される。そのように多重に結びついた流れの中で、左義長は継承されていくのである。

むすびに

本稿では 2025 年時点での大磯の左義長開催状況を事例とし、既刊報告類との比較を試みることで、現時点での左義長のありようを浮かび上がらせるこ

とを目的としてきた。4章で述べた通り、無形民俗文化財に指定されている左義長は外部の人々も行うことができる募金など、保存会などの旧来行事を維持してきた人々以外のかかわりが生まれている。

今回筆者が報告した左義長は、あくまでも長い時間の中での変容の一過程を映したに過ぎないのであることから、踏み込んだ考察にまでは及ばなかった。大北地区の準備の一部の様子を報告できていないことに加え、大北以外の地区がどのような様子であるか、記録していくことも今後の課題であろう。左義長が様々なアクターと結びついていくことでいかなる様相を呈していくか、引き続き調査を進めていくこととしたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、大磯町左義長保存会の二梶木政義氏をはじめ、保存会の皆様および大北地区の皆様には大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

注

- (1) 本稿では詳しく触れられないが、神奈川県その他地域の事例としては綾瀬市での道祖神の検討を行った小川の成果や[小川 2002]、伊藤重信による神奈川県下の小正月で石を焼く習俗の比較研究などがある[伊藤 1986]。大磯町教育委員会によっても、大磯町内の道祖神の悉皆調査が行われている[大磯町教育委員会編 1982]。大磯の左義長に関しては、国の重要無形民俗文化財に指定された際、田中が神奈川県史民俗編の記述を引用しつつ左義長を紹介している[田中 1998]。浜野は五輪石を使う習俗を分析する際に一番息子の事例を紹介しているほか[浜野 1997:5]、入江英弥は小正月行事の由来伝説として語られる、一つ目小僧と道祖神の話の分析の中で、子の神地区の事例を紹介している[入江 2002:10(7946)]。地域内でも高橋光によって、1980年ごろの左義長の様子が報告されている[高橋 1982]。このほか、日本民俗地図でも大泊や長者町の様子が記されている[文化庁 1971:226]。
- (2) 北下町には北浜海岸が、南下町には大磯港が、山王町には高麗山がある。提示にあたって距離や面積に関しては人家が密集している箇所での計測とした。距離は東西での最大幅を目安として計測している。あくまでも参考値として考えていただければ幸いである。
- (3) 大磯町政策課調べによる。
https://www.town.oiso.kanagawa.jp/gyosei/toukei/toukei_jyohou/zinkou/jinko2024_1/22501.html(2025年8月25日閲覧)
大磯町大磯には、北本町、南本町などの他の地区も含まれているため、あくまでも参考程度の数値となる。
- (4) 芦川酒店付近でも準備作業が行われていた。浜之町か坂下の準備だと考えられる。そして、ここからの記述は1月13日の片づけまで、特段の注記がない限りは大北地区のものである。
- (5) A氏によれば、2025年現在西小磯地区で3軒の農家が左義長の8つの地区にわらを融通している。例えば、農家Aは大北・浅間町・山王町を、農家Bは坂下・浜之町を、農家Cは子の神・中宿・長者町といった割合とのことである。
- (6) 浜之町や大泊でも現在は行われておらず、判明している限りだと子の神では2000年前後まで行われていたようである。ちなみに、茶屋町でも一番息子と同様の行事を行っていたことがあるという。下町以外の小正月行事の様子については再検討の必要がある。そのほか、東町では習字やオカザリを長者町のサイトで燃やしている
- (7) 作図に国土地理院地図 Vector を使用した。
国土地理院地図 Vector (2025年9月11日閲覧)
<https://maps.gsi.go.jp/vector>
- (8) 長田によればオカリコは1938年に廃止されているというが[長田 1998:199]、1960年時点では行われている[神奈川県教育委員会編 1962]。今後聞き取りや既刊報告による一層の検討により、各行事の実施状況を把握する必要がある。
- (9) 大磯町郷土資料館所蔵の調査記録による。
- (10) 下町地区で聞き取りすると、西湘バイパス開通時期に多くの漁師が陸に上がって国鉄などに勤めることとなったという話を聞くことができる。
- (11) A氏によれば、3代ほど前の会長のころからこの方法でのアンコの調達を試みられた。伐採業者側は管理の際にでてくる間伐材を文化財の実施のために活用でき、左義長保存会側もアンコとして使えるため、両者にとって互助的な関係であるという。
- (12) このほか、大磯小学校では小学校の校庭にサイトを作り、実演を行ったという。

- (13) 湘南ジャーナル 2015 年 12 月 18 日「存続危機に瀕する伝統大磯で広がる左義長の支援活動」(2025 年 9 月 9 日閲覧)
<https://shonan-journal.com/magazine/15317/>
- (14) もっとも、A 氏のアンコ調達の語りや日守の記述にみられるように〔日守 1986a:3〕、それ以前から地域外部とのかかわりがあることによって、左義長は存在していた。

参考文献

- 伊藤重信 1986「一つ目小僧とサイノカミの石―神奈川県における石を焼く習俗をめぐる―」『日本の石仏』37
- 入江英弥 2002「行事由来伝説「一つ目小僧と道祖神」の形成―目籠・事八日・斎日―」『民具マンスリー』34 (10)
- 大磯町教育委員会編 1982『道祖神調査報告書』（大磯町文化財調査報告書 第 22 集）大磯町教育委員会
- 大磯町文化史編纂委員会編 1956『大磯町文化史』大磯町教育委員会
- 大磯町役場政策課編 2024『広報おいそ』2024 年 1 月号
- 小川直之 1993『地域民俗論の展開』岩田書院
- 小川直之 1998「神奈川県の道祖神祭」『Report―大磯町郷土資料館だより―』17
- 小川直之 2002「道祖神とセエトバライ」『綾瀬市史研究』8
- 小川直之 2022「祭り・芸能の継承への取り組み―地域社会と行政・企業との連携―」石垣悟編『まつりは守れるか―無形民俗文化財の保護をめぐる―』八千代出版
- 長田平 1998「年中行事」大磯町編『大磯の民俗 (2)―大磯・東町・高麗地区―』（大磯町史民俗調査報告書 5）大磯町
- 神奈川県教育委員会編 1962『大磯の道祖神祭』（神奈川県民俗シリーズ 2）神奈川県教育委員会
- 神奈川県教育庁文化財保護課 1981『神奈川県の道祖神調査報告書』神奈川県教育庁文化財保護課
- 神奈川県立歴史博物館編 2020『特別展「かながわの正月―よい年になりますように―」』神奈川県立歴史博物館
- 倉石忠彦 2014「神奈川県の道祖神信仰」『縁』7
- 佐川和裕 1991「藤村の見た左義長―雑記帳をめぐる 2、3 の私見―」『Report―大磯町郷土資料館だより―』2
- 真保元 2024「神奈川県中郡大磯町の御船祭における予備的考察―船形山車をめぐる現状を事例に―」『現在学研究』14
- 杉井純一 1998「村制」大磯町編『大磯の民俗 (2)―大磯・東町・高麗地区―』（大磯町史民俗調査報告書 5）大磯町
- 杉井純一 2002「境界の民俗」『大磯町史研究』9
- 鈴木一男・飯田善雄 1981「大磯町の道祖神」神奈川県教育庁文化財保護課『神奈川県の道祖神調査報告書』神奈川県教育庁文化財保護課
- 鈴木通大 1998「信仰」大磯町編『大磯の民俗 (2)―大磯・東町・高麗地区―』（大磯町史民俗調査報告書 5）大磯町
- 鈴木通大 2003「大磯の左義長」大磯町編『大磯町史 8 別編民俗』大磯町
- 高橋光 1982『ふるさと伝承記』郷土史研究会
- 田中宣一 1977「年中行事」神奈川県企画調査部県史編集室編『神奈川県史 各論編 5 (民俗)』神奈川県企画調査部県史編集室
- 田中宣一 1998「新・国指定重要無形民俗文化財「大磯の左義長」について」『かながわの民俗芸能』62
- 永田衛吉 1987『神奈川県民俗芸能誌 増補改訂版』錦正社
- 浜野達也 1997「セエノカミの五輪石」『自然と文化 平塚市博物館研究報告』20
- 浜野達也 2005「セエトバライのオンベ」『民具マンスリー』38 (2)
- 浜野達也 2020「小正月の火祭りにおける道祖神の再生と復活」『自然と文化 平塚市博物館研究報告』44
- 日守高造 1986a「大磯（下町）の左義長― (1) ―」『資料室だより』1 (6)
- 日守高造 1986b「大磯（下町）の左義長― (2) ―」『資料室だより』2 (7)
- 日守高造 1986c「大磯（下町）の左義長― (3) ―」『資料室だより』2 (8)
- 平塚市博物館 1999『相模の道祖神』平塚市博物館
- 平野文明 1985「蘇る石塊―『神奈川県の道祖神調査報告書』(1981) をテキストにして、県内の道祖神祭を分析する―」『日本の石仏』36
- 平野文明 1986「蘇る石塊 (2) ―『神奈川県の道祖神調査報告書』(1981) をテキストにして、県内の道祖神祭を分析する―」『日本の石仏』37
- 俵木悟 2009「民俗芸能の「現在」から何を学ぶか」『現代民俗学研究』1
- 福田八郎 1968『相模民俗史 卷三 年中行事 人の一生 運搬具』私家版
- 文化庁 1971『日本民俗地図Ⅱ (年中行事 2)』文化庁
- 宮代伊佐雄 1980「左義長（大北の道祖神）」関野秀雄編『郷土誌北下町』私家版
- 和田正洲 1974『日本の民俗 14 神奈川』第一法規